

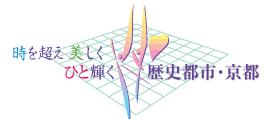
京のものがたり

きょうと

京都市図書館情報誌

vol. 10

平成17年8月発行



夢ふくらむ図書館に

絵本作家・小林豊氏によるギャラリートーク
(子ども読書の日記念事業)

特集 いきいき平安京

目次

- ② インタビュー
本は味方 文字は縁
隨筆家 岡部伊都子さん
- ④ 特集
いきいき平安京
- ⑥ 京都市図書館紹介
久我のもり図書館
こどもみらい館子育て図書館

- ⑥ 図書館コラム
感銘を受けた図書館が舞台の本
- ⑦ お知らせ
京都市中央図書館に文部科学大臣表彰
京都市立紫野高等学校教諭 山本純子さん H氏賞受賞
- ⑧ 利用者の声
テーマ:「私の図書館利用法」
- ⑨ 編集後記
「京」の今昔ものがたり

本は味方

文字は縁

京都を代表する随筆家・岡部伊都子さんに、読書への熱い思いや、書き手としての気持ち等について語っていただきました。

本は私の味方

私は生来病弱だったので、寝てばかりの子供でした。となると、本を読むことくらいしか楽しみがありません。ちょうど、子供向けの世界文学全集などが翻訳されて出始めた時期だったので、そういった本を一冊読むごとに、その国を旅するようでは楽しかったことを覚えています。外に出でいろんな体験をすることができない代わりに、読書することでも学べたことはたくさんあります。本は体の弱い私の味方でした。

書き手と読み手

書き手としては、自分の思いや感じたことを素直にそのまま書いています。「ええかっこをしない」。それによいと思つています。最後の最後まで、本音で生き、本当の思いだけを伝えたないと考えています。そうすることが、自分を育てる事にもなると思います。思いのたけは言った方がいい

し、言わなければ伝わらないのですから。ずっと言いたいことを好きなように書いてきた私ですが、まだまだ言いたいことがいっぱいです。

書き手は、その時その時の自分の気持ちを真剣に書いています。ですから、一人でも多くの方に、実感を持つて読んでほしい、真剣に受け止めてほしいと思います。他の方の作品を読む時、読み手としての自分もそうありたいと思います。本を媒介に、その書き手から得る情感、心、生身の思いといふものは大変なものです。そこに読書することは違う、本物の力が身につくのです。

本が結ぶ人の縁

著作は126冊になりました。ありがたいことと感謝しています。本になるからこそ、私の思いを伝えていくことができる、形として残すことができます。

著書のひとつ、『シカの白ちゃん』（筑摩

他人の意見にも耳を傾けること。間違つたら謝ること。より良い方向に変わり続けることを希望し、それを喜びにすることが大切だと思います。本を通じて、それができると思います。図書館には、そういう大切な思いや書き手の生命が込められている図書を同世代、老若男女はもとより、次世代にも伝え、語り継いで書び合っていく場であつてほしいと思います。

※岡部伊都子さんから、貴重な蔵書をたくさんご寄贈いただきました（現在、整理作業中）。この場を借りて、厚く御礼申上げます。

書斎風景

変わらぬ世の中で

書房、1983年刊）は、中国語訳、韓国語訳が生まれ、またスウェーデン語に翻訳された作品もあります。中国の蘇州市出身の歌手の方が、白ちゃんの歌まで作つてくださいました。国境も時間も飛び越えてひとの気持ちが伝わってゆく、これが本の力だと思います。

また、遠く離れた地で私の文章を読み、はるばる会いに来られる方もいらっしゃいます。どうぞどんな出会いがあるか、書き手にだつてわからない。本当の気持ちを何気なしにそのまま書いたことで、それが時に思いがけない出会い、新しいお付き合いが生まれるきっかけになるところなどを、度々経験してきました。私の本音が、本当に伝えたい人にまっすぐ伝わることで、奇跡のような出会いが起こる。まさしく本は縁、文字は本当に縁ですね。

岡部伊都子さん

○プロフィール

1923年、大阪生まれ。京都市在住。随筆家。主な著作は『岡部伊都子作品選・美と巡礼』全5巻、『京色のなかで』、『賀茂川日記』、『朝鮮母像』など多数。



インターネットで発信される大量の情報が、ほとんど泡沫のようになつていつ間に消えてしまうのと同様、たとえ推敲に推敲を重ねた活字だって消えてしまふかもしません。今の今、何が起るかわからない世の中ですから、それはある意味、当たり前のことです。でも、そこに込められた思いや、吹き込まれた生命といつもの尊ばれべきだと思います。情報が氾濫する世の中で、いろいろな考え方につれ、疑い、自分の考え方を持ち、それを表現すること。



剥げる白塗り

平安のお化粧は、白粉ののりが悪くならぬよう眉毛を一本残らず抜き取り、白粉を象牙のへらで厚く塗つて白塗りにしていました。

白粉は炭酸鉛（鉛の化合物）が主な原料でしたが高価だったため、米の粉を水でねつて代用する貴族もいたようです。貴族といつても裕福な人ばかりではなかつたからですが、その代用品が剥げて恥をかいた話がいくつも残っています。



藤原道長の年収は4億円？

平安時代に貴族といわれる人は、およそ150人くらいで、その家族をふくめても700～800人程度。数の上では、平安京の全人口の1パーセントにもなりません。

その中で、藤原氏の最盛期を築いた道長の場合、1年間の収入は国から給与されるだけでも4億円くらいになつただろうと言われています。貴族の給与は賃幣ではなく、現物支給でした。月ごとの食料と、春、夏の季節ごとの衣料が支給されました。

菖蒲重 表・菜種 裏・萌黄

百合 表・赤 裏・朽葉

色へのこだわり

平安時代には黒が最高の位をあらわすようになりました。上級貴族は儀式の時に黒を着ました。黄櫨染（黄色みをおびた茶色）や黄丹（赤みの強い黄色）は天皇や皇太子の色とされ、それ以外の者が着ることは許されませんでした。庶民の衣服のほとんどは、茶色が藍色でした。

女性の十二単は、15枚前後の重ね着で、15～20枚の近い重さになります。今回、各項目のフレームは「かさねの色目」（長崎盛輝著、京都書院、昭和63年）より夏の色を選びました。平安の色をお楽しみください。

いき いき 平安京

参考資料

「調べ学習 日本の歴史⑫ 貴族の研究」「衣食住にみる日本人の歴史②」「暮らしの歴史散歩生き生き平安京」「源氏物語 六條院の生活」「かさねの色目」「ローム君の京都博物日記」「平安京解体新書」「日本人」を知る本③」「京都歴史アトラス」「しらべ学習に役立つ日本の歴史5」「新修 日本絵巻物全集7 地獄草紙・餓鬼草紙・病草紙」「太陽 1994年3月号」

不潔な貴族？

迷信にとらわれていた貴族たちは月に4、5回しか風呂を利用しませんでした。便所も住居である寝殿造ではなく、部屋に置いてある桶箱という箱で用をたしていただけ、髪や身体、更に部屋と異臭を発していました。

そこでこの現実的な問題から、香を焚き始めたのです。

籠坏 整髪用の米のとぎ汁を入れる器



食事は1日2回

食事は午前10時ころと夕方の4時ころの1日2回でした。貴族の主食は米を蒸した強飯か、やわらかく煮た姫飯で、おかずは野菜、海草、魚肉など豊富でした。バーチやチーズのような乳製品もありましたが、肉食は仏教の影響で避けっていました。魚は、遠方から運ばれるため、干物や塩漬けが多く、新鮮なものは少なかったようです。

わかわら手 (若鶴冠木・若楓) 表・淡青 裏・紅

苗色 表・淡青 裏・黄

貴族の仕事は毎日半ドン

朝廷での仕事は、もとは早朝に行われていました。今ほど照明が発達していなかつたので、明るいうちに片付けていたのでしよう。そのため、貴族も早起きしましたが、だんだん遅くなり、夜更かしするようになりました。その理由は、天皇の居住空間の変化で、会議が生活の場に移されて、政治の実権も公卿に移り、彼らの私邸で行われることが多くなつたからです。また、夜になると生靈や死靈や鬼たちが活動すると言われていました。貴族たちはこれを本気で恐れていたので、「みんなで過ごせば怖くない」と考えたからとも推測されます。

平安後期の絵巻物のひとつ「病草紙」には、不眠症・歯槽膿漏・肥満など現代にも通ずる病気が多少誇張されて描かれています。これらの写実的な病の絵は、六道絵の一種として人間界の苦しみを表現したという説もあるようです。疫病から逃れる術が加持祈祷しかないとこの時代、人々にとつて病は、逃れがたいこの世の地獄だったのでです。

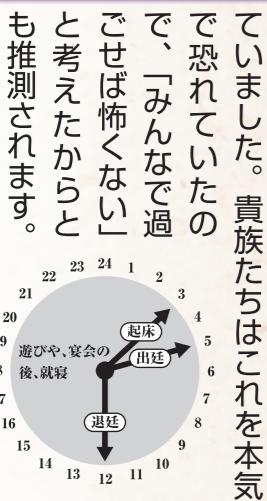


杜若 (燕子花) 表・淡萌黄 裏・淡紅梅

貴族が歯槽膿漏？

平安時代に貴族といわれる人は、およそ150人くらいで、その家族をふくめても700～800人程度。数の上では、平安京の全人口の1パーセントにもなりません。

その中で、藤原氏の最盛期を築いた道長の場合、1年間の収入は国から給与されるだけでも4億円くらいになつただろうと言われています。貴族の給与は賃幣ではなく、現物支給でした。月ごとの食料と、春、夏の季節ごとの衣料が支給されました。



桜 (桜) 表・薄色 裏・青

京都アスニー「平安京歴史ゾーン」へようこそ！



平安京復元模型

京都アスニー「平安京歴史ゾーン」へようこそ！

展示場所：京都アスニー、各京都市図書館の他、ゼスト御池サービスステーション、地下鉄京都駅地下街案内所などで販売しております。

展示時間：午前9時～午後5時 第2・4火曜日休館

入場料：無料 URL: <http://web.kyoto-net.or.jp/org/asny1/>

■はづかしのもり

久我のもり図書館のある久我・羽束師一帯は伏見区南西部に位置し、住宅地と田園地帯とが共存する、自然環境にめぐまれた地域です。近くには桂川が流れ、西山も峰を連ね、辺りには歴史のある神社や寺院が点在しています。また、平安時代には歌枕すなわち和歌が詠まれる地として知られてきたところです。年代のわかつているもっとも早い例では、延喜十三年（九一三）に、平安時代の代表的歌人のひとりである凡河内躬恒が詠んだ和歌、

はづかしのもりのはつかにみしものを
など夏草のしげきおもひぞ

杜の言葉散らし果てつる
があり、室町時代に入ると、公卿・三
条西公条の、

家の風吹かぬものゆゑはづかしの
など夏草のしげきおもひぞ

という和歌もみられます。この「はづかしのもり」こそ、今も当館近くに趣深く鎮座している羽束師神社です。また、室町時代後期には、貴族たちが吉野から京への帰路に立ち寄って和歌を詠み合った記録も残されています。

■図書館だより

このように、古くからの歴史的、文学的風土を有しているため、当館では、郷土史について造詣が深い方々の利用もあり、また反対に、これからこの地域に馴染んでいこうとする来館者も多い状況です。そこで、利用者と図書館の交流の一環として、毎月初めに「久

我のもり図書館だより」を発行しています。折々の久我・羽束師の風景写真も掲載しています。読後の感想文が寄せられる時もあり、また、お勧め図書の紹介が書かれている時もあり、内容は各月まちまちですが、それぞれの書き手の工夫のあとをうかがうことができるコーナーです。館からは、作品に親しみきつかけ作りの一助として、「文学

碑を訪ねて」(時には「文学の舞台を訪ねて」と題した欄を設けています。そこでは、古典文学から現代文学までジャンルを問わずとりあげ、読者の持つ幅広い関心に対応しています)。

■文化の発信地

さらに、定期的に更新を重ねているホームページにおいても、常に地域の情報を取り込み、利用者とのつながりを大切にするよう心がけています。これからも、文化の発信地としての役割を果たしていくために努力を重ねたいと考えています。



ホームページ <http://www.kyotocitylib.jp/kogamori/>

感銘を受けた図書館が舞台の本

■はづかしのもり

久我のもり図書館のある久我・羽束師一帯は伏見区南西部に位置し、住宅地と田園地帯とが共存する、自然環境にめぐまれた地域です。近くには桂川が流れ、西山も峰を連ね、辺りには歴史のある神社や寺院が点在しています。また、平安時代には歌枕すなわち和歌が詠まれる地として知られてきたところです。年代のわかつているもっとも早い例では、延喜十三年（九一三）に、平安時代の代表的歌人のひとりである凡河内躬恒が詠んだ和歌、

はづかしのもりのはつかにみしものを
など夏草のしげきおもひぞ

杜の言葉散らし果てつる
があり、室町時代に入ると、公卿・三
条西公条の、

家の風吹かぬものゆゑはづかしの
など夏草のしげきおもひぞ

という和歌もみられます。この「はづかしのもり」こそ、今も当館近くに趣深く鎮座している羽束師神社です。また、室町時代後期には、貴族たちが吉野から京への帰路に立ち寄って和歌を詠み合った記録も残されています。

■図書館だより

このように、古くからの歴史的、文学的風土を有しているため、当館では、郷土史について造詣が深い方々の利用もあり、また反対に、これからこの地域に馴染んでいこうとする来館者も多い状況です。そこで、利用者と図書館の交流の一環として、毎月初めに「久

我のもり図書館だより」を発行しています。折々の久我・羽束師の風景写真も掲載しています。読後の感想文が寄せられる時もあり、また、お勧め図書の紹介が書かれている時もあり、内容は各月まちまちですが、それぞれの書き手の工夫のあとをうかがうことができるコーナーです。館からは、作品に親しみきつかけ作りの一助として、「文学

碑を訪ねて」(時には「文学の舞台を訪ねて」と題した欄を設けています)。

ささらに、定期的に更新を重ねているホームページにおいても、常に地域の情報を取り込み、利用者とのつながりを大切にするよう心がけています。これからも、文化の発信地としての役割を果たしていくために努力を重ねたいと考えています。

■文化の発信地

さらに、定期的に更新を重ねているホームページにおいても、常に地域の情報を取り込み、利用者とのつながりを大切にするよう心がけています。これからも、文化の発信地としての役割を果たしていくために努力を重ねたいと考えています。



ホームページ <http://www.kyotocitylib.jp/kogamori/>

お知らせ

○京都市中央図書館に文部科学大臣表彰

子どもが積極的に読書活動を行う意欲を高める活動について優れた実践を行っている図書館に対して与えられる、平成17年度「子どもの読書活動優秀実践図書館文部科学大臣表彰」に、京都市中央図書館が選ばれました。今後も、より一層の子ども読書の充実に努めてまいります。

○京都市立紫野高等学校教諭 山本純子さん H氏賞受賞

山本純子さんの詩集『あまのがわ』(花神社、2004年刊)が、詩壇の芥川賞とも称される第55回H氏賞を見事受賞しました。京都市教育委員会ではその栄誉を称え、平成17年度「京都市立学校文化芸術賞」を授与しました。山本純子さんの詩集は受賞作の他『豊穣の女神の息子』(花神社、2000年刊)もあります。お近くの京都市図書館でお取寄せ等ができますので、ぜひ、ご一読ください。



テーマ

「私の図書館利用法」

●伏見区 本射 俊太さん（無職）

2年前、深草小学校内にコミュニティプラザとして図書館ができると知った時は「ああ、そうか」ぐらいに思つた。今まで本は自分で買い、所有する満足感（どうも不健全だが）と共に読んでいた。ところが、図書館を利用し始めると興味ある本を手当たり次第に借りられ、選択の幅が広がつたことはほんとにありがたい。予約した本で新しく購入されたものが何冊かあつたが、自分のために蔵書されたかと思うと、いい加減に注文はできないと責任を感じる。

●下京区 幸田 庄一郎さん（会社役員）

最近の図書館は、清潔で明るい快適な空間であり、かけがえのない私の友達である。

面白い本を見つけた喜び。何げなく開いた雑誌から得た情報の嬉しさ。

何にもまして食べ物をかむ音まで耳に残る文章、川面を渡る風の涼感、しつとりと両肩を包む闇の暗さ、いつとき自分が世界に浸ることのできる本に出会えるのも図書館のおかげである。

「日暮れなんとして、道なお遠し」の感あるが、ライフワークのテーマを模索している。

●東山区 葛城 正美さん（主婦）

今私の楽しみは、ミステリー小説を読むことです。一度読まれた方なら、やめられない、止まらない。ページを追うごとのドキドキ感がたまりません。シリーズで深みにはまってしまうことも…。ただ、一度読んでしまうとそれつきり、本棚の隅へ。「金田一」シリーズ等は、子供の絵本もあって、置き場所に困ったので、映画化されたり、面白かった本だけ手元に置くようになりました。街で話題になっている作品、作者の初期の作品を読みたい方は図書館がお勧めです。「大きな活字」の本もあります。

●上京区 高山裕子さん（学生）

京都にきた私は、図書館の数の多さにびっくりしました。また利用者も多く、生活に密着した図書館の在り方も新鮮でした。私はあまり自分から進んで本を読む方ではなく、どちらかといふと本とは無縁な方でしたが、ある本をきっかけに自分から進んで本を借りに行くようになりました。自分の趣味や楽しみで利用していましたが、最近では卒論に関する資料集めにも利用しており、年齢に合わせて幅広く図書館は利用できるので、これからもどんどん活用したいです。

●中京区 福田夕果さん（無職）

毎月、乳幼児への読み聞かせがあるのを知り、図書館へ行つたのが最初でした。靴をぬいでペタンと座れる幼児コーナーは、今では私も娘もお気に入りの場所。家事に気をとられることなく、落ちついて子供に絵本を読んでもげられるのがうれしい。買うと高い絵本は無料でたくさんの中から選べるし、必ず返却するので、家に10冊分の場所さえあればいいというのも助かります。

「京」の今昔ものがたり vol.10

発行
平成17年8月

編集・発行
(財)京都市生涯学習振興財団・京都市中央図書館
〒604-8401 京都市中京区聚楽廻松下町9-2
TEL 075-802-3133
<http://www.kyotocitylib.jp/>

編集後記